

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1193900071		
法人名	株式会社 スクールパール羽生		
事業所名	グループホーム ルミエール		
所在地	埼玉県羽生市上岩瀬1792-1		
自己評価作成日	平成29年8月26日	評価結果市町村受理日	平成29年11月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php?action=kouhyou_prof_topiigvosyo_index=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社シーサポート
所在地	埼玉県さいたま市浦和区領家2-13-9
訪問調査日	平成29年9月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

今年度は「ひとりひとりを見つめて、私たちから心に寄り添い笑顔に変えていきます。」という目標を掲げている。
この目標にした経緯は、入所者の認知症の進行や精神状態の不安定さが目立ってきたことが挙げられ、ここでしっかりと、入所者個人の現在の状態を把握し、今後の予後予測をしケアをしなければ、状態変化への対応と共同生活の確立に影響があると考えて設定している。
そして、私たちから、すすんでケアをすることにより、ひとりひとりの入所者らしい生活と、その結果として笑顔があふれるようになってもらえたら、最高と考えている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設より6年目を迎え、管理職の尽力・法人内他施設との連携・地域との交流のもとホームとしての落ち着きを感じられます。
●今年度は、職員による話し合いのもと親密度・関係性についてマトリックスによる分析がなされています。意見を表明しづらい利用者への意向把握や利用者同士の関係性向上に役立てるよう取り組んでいます。
●もともと近隣の小学校とは運営推進会議への校長の参加など親密な交流がなされていましたが、今年度より七夕交流会が始められています。更なる日常的な交流も模索されており、他の施設がうらやむ環境を有しています
●昨年度の外部評価における目標達成計画では「冬季の受診を控え、感染症予防に取り組む」旨を目標として掲げています。かかりつけ医の協力のもと実施がなされ、今期の感染症罹患0を実現するなど注力した取り組みがなされています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	“自分らしく、明るく、健康で心穏やかな光ある暮らし”について、職場内研修にて、専務から解釈と説明を受けている。高齢者における、様々な喪失感を自分たちのケアでサポートし、自分らしさの実現の手助けをすることを実践していく。	利用者に寄り添う支援を目標として掲げ、フロアの誰もが見えるところに掲示している。開設より6年目を迎え、方針の浸透とともに職員の成長を実感している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域には、多くの社会資源がある。小学校1年生との七夕交流をきっかけとし、いずれは小学生が気軽に施設に立ち寄り、高齢者との自然な交流(本読みや宿題など)ができることを、学校関係者と共に目指している。	日頃の交流から近隣の小学校との七夕交流会が始められており、個人情報の保護など細やかな配慮のもと行われている。また近隣の短期大学とも引き続き交流の深化に努める意向をもっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症と精神状態の不安定からの、徘徊の事例があり、特に近隣の小学校や公民館の敷地内に入ることがあった。その際は、地域の協力があり、そっと見守ってもらうことができた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	昨年の外部評価において掲げた目標を運営推進会議にて提示している。その一つに、感染予防対策について目標を掲げ、その結果を予防期間は報告をしている。昨年は、インフルエンザ・ノロウイルス罹患ゼロの実績となった。	行政や住民代表のほか、小学校長・公民館長など多様な地域の方々への出席のもと開催されている。市の出前講座を活用して防災の講義を開くなど工夫した取り組みがなされている。	このほか出前講座には、認知症サポーター養成講座もあり、広く受講者を募り開催されることが期待される。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の高齢介護課担当者が運営推進会議のメンバーに固定されている。会議の際は、事業運営や活動報告及び事故報告を通じ、情報共有を図っている。その他に適宜、必要事項については、連絡調整をしている。	所在地が地域包括ケアシステムのモデル市町村に指定されており、システムの理解をすすめ、行政および地域包括支援センターと連携しながら地域福祉の向上に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	高齢者の身体拘束及び虐待については、職場内研修において、外部講師を招聘し、基本的な知識の理解から、職員が身体拘束及び虐待に陥ってしまった時の、精神的なダメージについて学ぶ機会を設けている。	虐待防止・身体拘束の廃止・接遇について事業所内研修を実施している。外部講師を招いての研修会開催もなされており、職員の資質向上と利用者サービスへの反映がなされるのであれば、投資を惜むことなく実施する意向を持っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者の身体拘束及び虐待については、職場内研修において、外部講師を招聘し、基本的な知識の理解から、職員が身体拘束及び虐待に陥ってしまった時の、精神的なダメージについて学ぶ機会を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、入居している方には、必ず家族がおり、単身の方がいないこともあり、成年後見制度を活用する事例もない。そのため、浅い知識として、職員にはあるが、深く理解したり、活用に至るまでにはない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約にあたっては、十分な時間を割き、丁寧な説明を実践している。加算の改定時に、家族からの問い合わせがあり、面談を通じて説明責任を果たしている。そのため、過去に大きなトラブルに発展していない。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に、家族の代表者に参加していたり、事業運営における意見や要望、質問を受け付け、ひとつひとつ丁寧に対応している。会議中に解決できないものについては、後日に連絡にて対応をすることもできる。	運営推進会議・面会・ケアプラン更新時にコミュニケーションを図り、信頼を得られるよう努めている。本評価に伴う家族アンケートにおいてもケアプランの説明・話し合いについて高い支持が得られている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	現時点では、働きやすい環境にあるのか、職員からの要望は目立っていない。代表者や管理者としては、直接処遇職員の要望や意見を受け入れる準備は整えている。	職員の癒しのためにアロマセラピーの研修を行うなど福利厚生の実現に努めている。職員が自発的に業務行えるよう指導を進めている。	職員には、ホーム内だけでなく、外部の方との交流により資質を向上させてほしいとの願いをもっている。外部研修や他施設との交流など機会を見て進める意向を持っている。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	事業所の責任者(代表者)はほぼ毎日来所し、現場の状況を把握・確認している。各職員の勤務状況についても的確に把握しており、給与や勤務に対する希望、仕事に関する意見などには十分に時間をかけて対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内での新任研修や現認研修の他、社外での地域介護事業者向け教育プログラムに参加している。テーマ、内容にあわせた人選をし、ほとんどの職員がなんらかの研修が受けられるよう配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	事業所責任者(代表者)の築いたネットワークを通じて他の事業所との交流は頻繁に行っている。運営のノウハウ、環境づくりなど参考になる点が多い。職員間の交流、勉強会も数回行っているが、今後は更に回数を増やし、交流を深めていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期の面談時は、お互いに緊張感を抱いている。できる限りオープンマインドに心がけ、本人のこれから始まる生活の不安を取り除くことができるように、丁寧に対応をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス利用のはじめの家族の状態は、それぞれのケースにおいて違っている。それぞれ、どんな状態であっても、本人及び家族の望む暮らしに近づけられるように支援に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期面談において、本人の身体面及び精神面の双方から鑑みて、グループホームでの暮らしに向いているのか検討をしている。検討の結果、他のサービスの必要性が高い場合は、他のサービス事業所の提案や担当者へ繋げている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	グループホームの職員の異動は極力避けており、生活を共にする関係性や馴染みの関係性に重点をおき、事業所都合による環境の変化をしないように配慮している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の面会の際は、入居者の日頃の暮らしぶりや、最近の出来事、エピソードを伝えるようにし、ここでの生活が、離れた家族にも見えるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	全ての入居者において、身体面や認知面の状態が、昨年よりも低下傾向にある。そのため、すすんで馴染みの人や場所に向かうケースはなくなってきているが、事業所から関係性を絶つことはしていない。	家族会の発足検討・納涼祭への招待など、より家族との交流が深まるよう日々思案している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	グループホームにて共同生活をする9名の関係性を図表に表し、入居者同士の関係性や距離感を把握することにより、良好な雰囲気づくりやトラブルの未然回避に役立てることができている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後においては、本人及び家族に対し、積極的な関わりはしていない。 施設への入所した方などについては、入所した施設職員と会ったときに、暮らしぶりや近況の確認をする程度となっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	昨年の事業目標は、健康であることを念頭においていた。まずは生活の基盤を整えた上で、本人の望む暮らしに、色をつけていくようにしている。 困難な場合は、家族との相談のもと検討をしている。	今年度は、職員による話し合いのもと親密度・関係性についてマトリックスによる分析がなされている。意見を表明しづらい利用者への意向把握や利用者同士の関係性向上に役立てるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	自宅にて、自立していた生活と、現在の施設での生活には、認知機能の低下によ、見守りが必要となる生活スタイルに移行はしてきているが、できる限りの自主性は重視している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	共同生活をする上で、ひとり一人の暮らし方もあるが、入居者相互の関係性や親密性と個人の潜在的な力の把握について、職員はできている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランに対して、毎月モニタリングやケースカンファを実施している。また、モニタリングやケースカンファに限らず、日々のケアや支援の流れから、プランの見直しになるケースも現れている。	家族からの要望聴取に注力しており、ケアプランへの反映に努めている。モニタリングを毎月実施し、ケアプランに沿った支援の実施に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	現在の個別の支援経過には、その時の関わりや表情及び情景などの記録が弱いため、毎月のケースカンファにて補うことにより、ケアの気づきに結び付けている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状態変化が顕著な方に対しては、食生活や服薬管理及び生活習慣や環境など多方面から検証し、適宜ケアを変化している。 突発的な本人の要望に対しても調整をして、叶えられるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	施設と地域は共に社会資源となる。そのため、施設で暮らす入居者も社会資源から受ける影響もあれば、その反面もある。”すべては人から始まる”ことを念頭におき、互いに支え合えるコミュニティー創りを目指していきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	その入居者の、昔からのかかりつけ医との繋がりを、入居と共に絶つことはなく、その後も同じ医師のもとで診断を継続することで、病態や身体状況の変化の察知が早くできている。	昨年度の外部評価における目標達成計画では「冬季の受診を控え、感染症予防に取り組む」旨を目標として掲げている。かかりつけ医の協力のもと実施がなされ、今期の感染症罹患0を実現している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の日常生活における生活場面での、介護職員の気づきを、看護師に伝えることにより、看護師による看護的判断のもと、経過観察か要受診対応を相談し決めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療ソーシャルワーカーとの連携は、電話連絡や直接面談を通じて実践している。特に、入院してから1週間～1カ月は、連絡を密にして、状態変化や改善状態の把握に努めている。退院前は、必ず面談をして、退院後の注意や予後予測を相談している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約段階にて、「急変時における延命等の意思確認書」をもって、本人及び家族の意思確認をしている。ただし、実際の重篤な場面になると、家族の気持ちの揺れもあるため、一度意思確認を表明したから変更できないということではなく、何時でも柔軟に変更できることを説明している。	入居時には重度化と終末期の支援について意思の確認がなされている。状況の報告をしながら、家族の気持ちの変化には柔軟かつ都度対応していく意向を示している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年、職場内研修において、緊急時における救急対応や所轄消防本部より救急救命士を招聘し、心肺蘇生法などの講習を受けることにより、命の危機に対しての実践力を高めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会の企画する、年2回の消火訓練、避難誘導訓練の実践と職場内研修における防災対策講習を通じて、災害時の対応について学んでいる。地域の自衛消防計画に、施設も入っており、地元の消防組織とも繋がりがあがる。	火災想定を中心に避難訓練の実施がなされている。特に水害については対策を講じる必要性を感じており、地域および行政機関との連携のもと、段階別の対応・一般家庭等との避難時間の差などの検証を進める意向を持っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	代表者は”接遇”については、サービス業としては、譲ることができないと考えている。言葉かけや身だしなみ及び立ち振る舞いが見苦しいものであってはならない。 外部講師を招聘しての研修も実践している。	事業所内研修では接遇を取り上げるなど利用者とのコミュニケーションを大切にしよう取り組んでいる。職員だけでなく利用者同士の関係性についても重視しており、考察を重ねながら支援にあたっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員の考えや思いを入居者に強いることは行っていない。全職員が「〇〇してみますか。」と言うように、本人の意思確認が自然とできる能力が備わってきている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な時間の流れはあるが、職員の業務のながれに、入居者を当てはめることはしていない。ゆったりとした、共同生活独特の時間が流れている。そのため、職員は仕事が片付かないジレンマはあるかもしれない。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	近隣のショッピングセンターにて、買い物を楽しんでいる。 女性の方は季節に合わせた洋服の購入をしたり、品物を見て楽しむことが、自然とできている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	主食から副食、汁物などの食事づくりが始まり、4年が経つ。その能力は、個人のADLや認知面が低下している傾向はあるが、現在も部分的に関われる調理に参加してもらっている。また、職員も苦勞をするが、関わりを持つようにしている。	盛り付け・下膳・食器洗いなど食事づくりへの参加を促しており、利用者の能力と意欲にあわせて取り組んでいる。また食事や水分の摂取量にも細やかな支援に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の形態や食事に対する嗜好を把握し、できる限り、全量摂取を目指している。 食事による、必要な栄養素を補給できないことにより、身体構造や精神疾患への影響も起こり得ることとなる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食事が済んだ後は、自分で下膳をし、その後洗面台において、口腔ケアをするという一連の流れをつくり、ほぼ全入居者が、この一連の流れを習慣化している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	9名中2名のリハビリパンツ及び尿とりパットのを使用している。その方たちにおいては、失禁してしまった感覚も分からなくなってしまっている。今後は、排泄のタイミングなどの検証をして、失禁の頻度を少なくする努力も必要となる。	利用者一人ひとりの排せつのタイミングを検証し、把握のうえ支援に取り組んでいるが、水分摂取や健康状態の変化を見極め、都度柔軟な対応を心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	管理栄養士によるバランスのとれた栄養管理のもと、献立の作成をしている。ただし、高齢者の代謝は悪く便秘の傾向がある。運動も生活動作や身体を動かすレクリエーションに取り組む程度では、なかなか腸の活発化にはなっていない。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の声かけをした時点は億劫で拒否をすることがあるが、完全に拒否をする入居者はいない。入浴剤による香りの楽しみだけでなく、リラクゼーションや嗜好を凝らした演出も考えても良いかもしれない。	入浴を拒否する利用者に対しては、タイミングを見計らったり、支援職員を変えたりと工夫しながら対応に努めている。決して無理強いをすることなく、利用者の意思を尊重しながら入浴間隔が開かないよう清潔保持に取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室は完全個室でプライベート空間は確保できている。また、休息する時間も、本人の自由に任せている。夜間帯は室温や寝具にて温度調整をして、心地良い眠りに就いてもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬は、看護師が管理している。服薬時は、誤薬がないように、介護事故予防ガイドライン(厚労省)の誤薬にもとづいて、服薬管理をしている。病気の症状と副作用の因果関係についても、現場で考えるようになってきている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今年目標でもある、ひとりひとりを見つめるとい部分においては、少しずつ本人の背景についても考えるようになってきた。生活歴や嗜好などについては、聴き取り不足がある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家族や職員と一緒に自由に出かけられる環境は整えてある。生活必需品が欲しい場合などは、預り金を使っての買い物にも行くことはできる。地域の方との協力にて外出は難しく、外出先にて地域の方との会話をすることはある。	一か月に一回は行事を開催し、御花見などの外出が実施されており、楽しむ姿が写真に収められている。遠出が難しい場合でも、玄関先で外気に触れたり、ゴミ捨てと一緒にいたり日常の中で工夫をしながら取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族から、預り金を用意してもらっている。所持については、自己管理できる方は少額を所持しているが、基本的には事務所の金庫にて保管している。外出先で、買い物をし金銭を自ら使うことは出来ないため支払いは手伝っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	事務所の電話は、いつでも使用できるようにしているが、特に入居者自らが電話の使用の訴えをすることがない。また、手紙についても、同様に訴えはない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木造の建屋で、温もりを感じるができる。また、南側には大きな窓があり、朝から夕刻まで、採光に富んでいる設計になっている。オレンジ色等の暖色系を基調としており、落ち着いた雰囲気創られている。	時に利用者にも手伝ってもらいながら、日々共有空間の清掃を行っており、清潔が維持されている。庭には園芸スペースがあり、野菜作りなどへの利用も模索している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングの一角には、長椅子とテーブルを用意しており、仲間との語らいの場及び憩いの場として環境を創っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で利用していた、馴染みにあるものや家具、思い出深いものを自由に持ち込むことができ、自宅の部屋と同じ環境にて、安心して暮らせるようにしている。	居室および共有空間は十分なスペースを有しており、転倒防止等安全に配慮した導線の確保に努めている。居室は各利用者がテレビを見るなど自由に過ごせる空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分でできることに対しては、できる限り介助をすることなく、本人主体で行動をしてもらっている。職員としては、できない部分のサポートをするようにしている。ただし、決して放置することではないと、職員は共通理解している。		

